

「京都市伝統産業の日」本ものに出会える日—おいでやす染のまち本能—
公開工房ツアー報告

藤西町 奥村直己 (29 歳)

- 公開工房ツアーの意義とソーシャル・キャピタルとの関連性の考察 -

The Relationship between Community Development in Honnoh and Socail Capital

【工房ツアー】

私はこの日、午前 10 時から午後 5 時まで学区内にある工房を見学する公開工房ツアーの案内人をつとめました。今回ツアーにご協力いただいた公開工房は勝山引染（引染）（三文字町）、中東盛染工（型染め）（三文字町）、金彩荒木（金彩加工）（六角油小路町）、村田縫紋（縫紋）（三条油小路町）、上木友禅（彩色友禅）（越後町）、伊藤（手作掛軸）（元本能寺南町）の 6 件でした。

「勝山引染」では、縦長の作業場に張られた生地に刷毛を引いて色をつけていく引染作業が行われていました。錦小路通に面した玄関先は普通の家屋と同じ間口なのですが、入り口を抜けると、路地が深く奥に延びていて、突き当りの階段をあがった 2 階が作業場になっていました。

その日は蹴鞠をするときに履く袴の生地に色付作業が行われていました。生地は植物繊維（苧麻）から織られる越後上布と同じように、吉野の葛の繊維から作られた布地に、海草を原料とした染料で染められていました。布地を張るために長い布の合い間に伸子（しんし：生地を伸ばすための道具）が付けられており、刷毛が直接当たっても外れない伸子によって、軽快に地色がつけられていく様に参加者は感動をしていました。

作業場にはエアコンなどなく、冬は寒く、夏は蒸し暑い中で作業をされるそうです。作業場内の湿度によって引染した際の染料の乾く時間が異なるそうですが、色むらを出さずに染めるところは技の見せ所でしょう。

「勝山引染」のすぐ横の「中東盛染工」も公開工房ツアーの訪問先です。中東さんの工房も勝山さんと同じく、錦小路通から見ると普通の家屋ですが、間口のちょっと左に奥へと伸びる路地があり、そこを進んで階段を登ると縦長の工房がありました。中東盛染工では、型紙を使って色をつけていく型染めが行われていました。

当日は、静岡県からの注文ではっぴに使う生地に型を使って色をつけていく作業が行われていました。工房に入ると天井のラックに大きく長い木の板が所狭しと掛けられているのが見えます。型染めはこの長い木板の上に生地を張って行うのです。一反の生地が型染めされると、木板を天井のラックに上げて染料が乾燥するのを待ち、その間に次の木板をおろして、違う反物の型染め作業に取りかかります。木板は人の身長何倍もの長さで、と

でも重そうです。ラックに上げる作業は一人の人間では到底無理だと思うのですが、中東さんはてこを利用してうまく板をラックへ上げていました。

「中東盛染工」ではオリジナルの型のデザインを持っており、オーダーに応じて型染めをされています。インターネット上にホームページを立ち上げ、全国からオーダーを受け付けておられるそうです。現在は呉服問屋が集まる「室町」からきものを作るための型染めの仕事がめっきり減ったそうですが、インターネットでの仕事の受注が増えつつあるそうです。京都には全国的にもレベルの高い染織の技術があり、「織れないものはない」といわれる西陣が世界最高水準の織のテクノロジーを持っているように、本能学区にはレベルの高い染のテクノロジーが存在します。以前は「室町」からの仕事の受注が多かったと思いますが、インターネットによる受注は全国、さらには世界へとマーケットを広げることができます。誇りを持ちながら、しかしおごることなく染のテクノロジーをうまく使った新たなモノの創造を行うことができれば、本能の染業に必ず未来があると思います。

「村田縫紋」は油小路通からちょっと入った路地にありました。村田さんは家の2階で作業をしておられました。押入れには反物が積まれており、紋刺繍のできあがった反物とこれから作業される反物がありました。

紋を刺繍する際には紋の型紙を使って下絵をつけた後、その上に刺繍を施すそうです。刺繍をする際に好みの糸の太さを生み出すために、糸の撚(よ)りを解いて、適当な数の糸の繊維を束ねて口で加えて湿り気を与えて撚りながら糸を作られている様子はまさに職人芸という感じでした。何とも刺繍で紋を作るとは気の遠くなるような話ですが、村田さんのお父さんが作られたという手の込んだ豪華な作品を見せていただき、参加者はその時間のかかる作業に驚いていました。また「紋帳」という紋の辞典を見せていただき、参加者はその紋の数に驚くとともに、自分が生まれた地域にある紋を興味深く「紋帳」から探していました。

「金彩荒木」は油小路通沿いにあります。のれんをくぐって階段を上った2階が作業場になっていました。周りには荒木さんが金彩を施した作品がずらりと並べられており、ほとんど売約済みというのに驚かされました。ラジカセから流れるジャズが荒木さんのセンスの良さを示していました。

ちょうど荒木さんは、女性デザイナーの方から頼まれたというクリスマス用のきものを製作中で、緑地の生地にクリスマスツリーの金彩を施されていました。なんともモダンで、メルヘン的な意匠です。

ご存知の方も多いと思いますが、荒木さんは老舗のメーカーや呉服店から仕事を受注されており、京都御所の迎賓館にもお仕事で参加されたそうです。金彩の技術、技法は、江戸時代に始まった宮崎友禅斎による友禅染よりもずいぶん前からあったものです。昔は金彩がはがれたりすることも多々あったようですが、荒木さん自身で様々な樹脂を混ぜて、

金彩耐久技術の改良研究が行われているそうです。化学会社の方とも相談しながら行われているようですが、例えば液晶ディスプレイに使う樹脂フィルムは世界の各社が競って開発をしていることから伺えるように、樹脂は現代で最も注目され開発が進んでいる素材の一つです。時代の最先端の樹脂テクノロジーと、伝統ある匠の技を融合する仕事を荒木さんが担っているというわけです。

「上木友禅」は六角通りから路地を少し入った越後町にありました。私が子供の頃は公文の教室に通う際によく通った路地です。上木さんの作業場も玄関を入れて階段を上った2階にありました。

2階の作業場はすっきりと整頓されていて、仕事のためだけにスペースをゆったりと使っているそうです。部屋の各所には反物の生地を送るロールが取り付けられており、生地を引っ張ってロールを転がしながら反物を送り、順次絵付けをしていくそうです。荒木さんの作業場にも同じような仕掛けがあったのですが、部屋の大きさや形状に応じてその部屋オリジナルの装置を自分で作られるそうです。

上木さんの周りには染料の入った小さな小皿がたくさん並べられ、デザイン画をみることなく、手際よく生地に彩色されていく姿に、参加していた洛陽工業高校で染織を学ぶ学生はただ黙って見入っていました。長年の仕事の経験から上木さんの頭の中に様々なデザインが入っていて、注文を出す問屋からこのような感じで描いて欲しいと聞くだけで、後は上木さん任せだそうです。まさに職人のなせる業ですが、問屋も上木さんに依頼をしたときに、仕上がってくる商品が想像できているところは感心します。

手作掛軸工房の伊藤さんは、本能館すぐ横の蛸薬師通沿いにありました。入り口にカフェの案内が出ていますが、道から見ると普通のお家です。

玄関を入るとギャラリー風にハンドメイドの掛け軸がずらりと並んでいました。奥の竹柵に囲まれた庭から明るい日差しが入っていて、居間には大きな和風の木のテーブルがあり、その上に置いてある茶瓶からは湯気が立っていました。テーブルの周りにはおしゃれなグラスと茶葉の入ったポットが並べられ、私の好きなαステーション(FM)がかすかに聞こえてきます。まさに和風カフェなのですが、京都の家屋の良さを現代風にうまくアレンジをしながら引き出していて、おばあちゃんの家でしか日本の家屋に触れることのできなかった私にとって、やっぱり自分で家を建てる時は、和式の家屋だと強く思わせられた素敵なお家でした。

手作掛軸工房では、自分で好きな布切れを使って掛け軸を作ります。つまり自分のお気に入りの生地を掛け軸にして残しておくことができるわけです。この工房では定期的に手作掛け軸の講習を行っておられるそうで、もちろん和風カフェでお茶を楽しむこともできます。

【まちづくりとソーシャル・キャピタル】

今回の公開工房ツアーは京都市「伝統産業の日」事業の中で、非常に好評を得ているものだそうですが、参加者は娘さんから参加してよかったと勧められてやってきたご夫婦や、染織に興味があって参加された方、市民新聞や「伝統産業の日」のパンフレットを見て参加された方などがおられました。やはり口コミで知って参加された方が多いようです。「おもしろい」うわさというのはすぐに広まるものなのでしょう。

私は子供の頃に本能学区で育ち、今回の工房ツアーで通った路地や通りは、知っている道ばかりです。しかし初めて工房ツアーに参加させていただいたところ、驚きの連続でした。なにげなく小さい頃からよく前を通っていた場所で、こんなお仕事をされていたのかと発見することばかりでした。新しい場所に来たような発見ばかりで、私は何も「本能」のことを知らなかったのだと思いました。

この工房ツアーは、伝統産業教育という点で、かなり質の高い研修であると思います。工房の職人さんの仕事と技術を見学するだけでなく、その職人さんがどのような環境で仕事をされているかを見せていただけることができるからです。農業と同じように、染織という業（なりわい）は、仕事と生活が一体化していて、切っても切り離せないものです。今回のような工房ツアーは、これからの日本を作っていく若い人々に染織業を理解してもらうには、十二分に価値のある伝統産業教育だと思います。そのことを知った若い人々の中から、しっかりとした意志をもって染織業の仕事をしてみたいという後継者も生まれてくると思います。

またこのツアーはまちづくりという視点でみた場合には、本能の住民が自分たちの住んでいる地域にどんなことをしている人々がいるかを知る良い機会になっています。発展途上国の農村の地域開発では、まずリソース・マッピング(Resource Mapping)と呼ばれる手法で、自分たちの地域にどんなリソース（資源）があるかを住民たちが調べることが行われます。資源には人がもっている技術もあれば、お金や資材や食料などのモノも含まれます。様々な資源が地域にあるにも関わらず、知っている人もいれば知らないひと多いというように資源の認識の共有ができていないことが多くあります。その地域にある資源を認識し、そしてそれをうまくみんなで活用することによって地域全体が発展する可能性が生まれてくるのです。

「染のまち本能」ということで、染業に関する事業からまちづくり活動が行われ始めましたが、本能には染織に携わる方だけでなく、様々なことをされている方が住んでおられます。将来、染織に関する活動で経験を積み、他の分野の活動も始めることができれば素晴らしいと思います。

また今回の工房ツアーですばらしいことだと思うことは、酒屋の岡山さんや金物卸の木村さんなど、染織と違った分野の仕事をしている本能学区の多くの方々が、工房ツアーのガイドや設営・準備のためにボランティアで参加をされていることです。これは地域の人々

の繋がりがあからこそなせるわざです。私が小さい頃から陸上や剣道クラブ、綱引きチームの活動が盛んに行われ、また区民運動会も堀川高校に会場が移りましたが、現在まで活発に行われてきました。本能の人々の絆がこれらの地域活動で育まれてきたわけです。

今まで行われてきたこれらの活動は地域の子供や人々に対して、いわば本能の人々が学区の内に対して行ってきた活動です。しかし、現在のまちづくりの活動は「外」の人々に向けて発信する活動になっています。学区の統廃合もあって、今までと違った学区とも関わることになり、より自分たちの地域を意識しながら発信を行っていかねければならなくなったのかもしれませんが、このことは今までの地域活動の流れで一步発展した段階に到達したのではないかと思います。

先ほど述べた人々の繋がりは学術的に呼ぶとソーシャル・キャピタル(Social Capital)にほかならないと思います。ソーシャル・キャピタルとは、地域の人々の信頼(trust)や行動様式・規範(norm)、ネットワーク(network)を指すのですが、ソーシャル・キャピタルが多い地域は人々が生き生きとして充足感に満ちています。モノは使うとなくなるのが普通ですが、ソーシャル・キャピタルは使われないと消えてなくなってしまいます。本能のソーシャル・キャピタルはまさに連綿と行われてきた地域の活動によって生まれ、維持されてきたのだと思います。

人づきあいのなかで、「出る杭は打たれる」というように、良いことを行おうとしているのに新しい活動の芽をつぶしてしまったり、人の足を引っ張るなどのことがあります。このような人々の行動様式はネガティブ・ソーシャル・キャピタルと呼ばれているのですが、地域で凝り固まってしまうことなく、よりオープンな地域づくりをしていかななくてはならないと思います。現在はまちづくり委員会に市内の大学生や新しい本能学区の住民など様々な新しい人々がやってきてくれています。これは開かれたまちづくりを行うのに不可欠なことだと思います。また幸いなことにまちづくりセンターや京都市の方々もきてくださっています。

ソーシャル・キャピタルの考え方をさらに進めると、内なる絆的ソーシャル・キャピタル(Bonding Social Capital)とそれを超えてより開かれたソーシャル・キャピタル(Bridging Social Capital)があります。今までの体振の活動や区民運動会で地域の内なる絆を高め、さらに現在のまちづくりの活動は、地域外の人々や団体、行政(government)ともリンクさせた、より開かれたソーシャル・キャピタルを生み出す活動に発展してきたのだと思います。日本人は何でもお上に頼りがちになってしまう国民性を持っているのかもしれませんが、行政に支援を求めながらもそれに期待しすぎることなく、自分たちで行動していくそのバランスをうまく保つことが重要です。また外ばかりに力を注ぎすぎることなく、内の人々のネットワークもうまくケアをしながら育てていくことができれば、すばらしい本能学区を将来に引き継いでいけるのではないかと確信しています。そしてこの本能にあるソーシャル・キャピタルをまちづくりの活動を通じながら、本能の若い人々にうまく受け継いでいかななくてはならないのだと思います。

参考図表

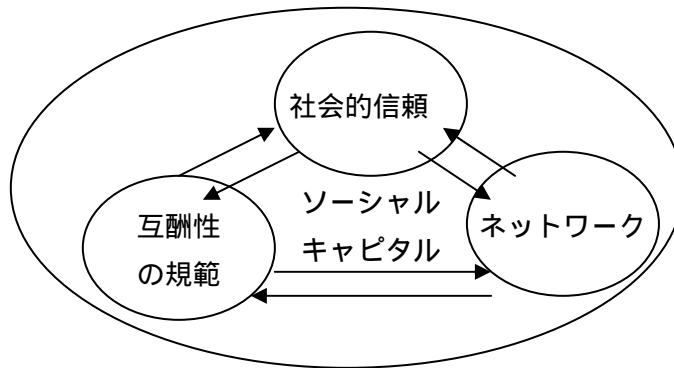


図1 . ソーシャル・キャピタルの概念イメージ

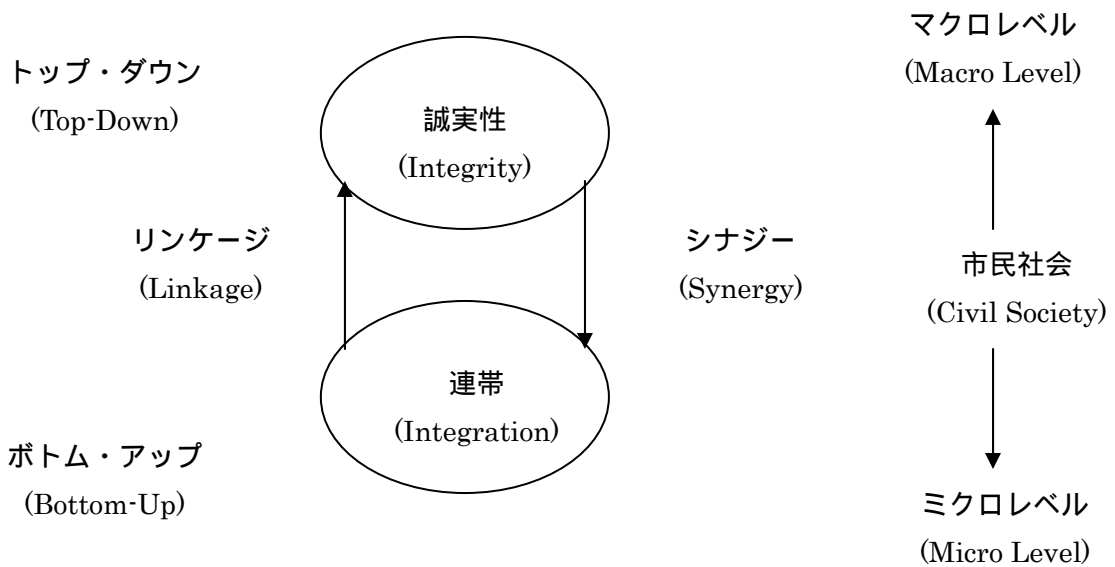


図2 トップダウンとボトムアップによる社会の発展とソーシャル・キャピタルの形態
(Woolcock 1998: Top-down and bottom-up development and the forms of social capital)

- ・ 社会上層組織の誠実性 (Organizational Integrity): 上層部の権力を維持する組織内部のまとめり
- ・ 連帯 (Integration): 地域の組織と個人の結合関係
- ・ シナジー (Synergy): 上層部の大きな組織のアカウントビリティ、つまり下層部の組織や個人にアプローチしようとする姿勢
- ・ リンケージ (Linkage): 下層部のグループや個人から上層部の組織にアクセスできる橋渡しの関係性

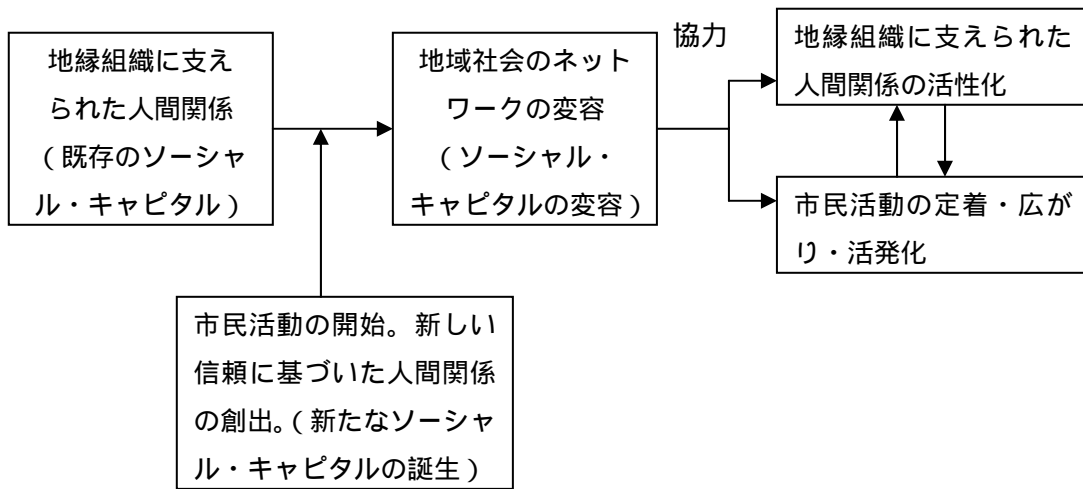


図3 . 既存のソーシャル・キャピタルと新しく生まれたソーシャル・キャピタルの変容と活性化

参考文献

- [1] Woolcock, Michael. 1998. Social Capital and economic development: Toward a theoretical synthesis and policy framework. *Theory and Society* 27:151-207.
- [2] Woolcock, Michael and Narayan, Deepa. 2000. Social Capital: Implications for Development Theory, Research and Policy. *The World Bank Observer* 15 (2):225-249.
- [3] 内閣府国民生活局市民活動促進課. 2003. ソーシャル・キャピタル豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて.
Available from <http://www5.cao.go.jp/seikatsu/npo/report/h14/sc/honbun.html>.
- [4] Putnam, Robert D. 1993. The Prosperous Community. *The American Prospect* spring:27-40.
- [5] Putnam, Robert D. 1995. Bowling Alone: America's Declining Social Capital. *Journal of Democracy* 6 (1):65-78.